

# 子どもたちに本物のミュージカルの感動を伝えたい。

(山口県下関市)

下関市民ミュージカルの会 代表 **伊藤 寿真男**



## プロフィール

1948年山口県生まれ。早稲田大学から劇団四季付属研究所を経て下関市に帰郷。1988年に下関市民ミュージカルの会を設立し、代表に就任。会はサントリー地域文化賞などを受賞している。

ミュージカルを公演しようと決意したのです。

**Q** 十分な寄付金も集まらなかったのに、どうして下関でミュージカルを考えたのですか。

伊藤：あの時に強く感じたのは「地方ゆえの不平等」です。その当時、東京・有楽町の日

生劇場では毎年、55日間も子ども向けのミュージカルが公演され、子どもたちはスポンサー企業から無料で招待されていました。その一方で、地方の子どもたちは本物の演劇の感動や素晴らしさを実感する機会がほとんどありません。私は子どものころから演劇の世界に漬かり、演劇の楽しさや素晴らしさを自分の体で感じてきました。それを地方の子どもたちにも伝えたい、次代を担う子どもたちに本物のミュージカルを見せたいと考えたのです。

確かに、行政の施策として地方で演劇を公演する事業はありますが、残念ながら本物の演劇にはなっていません。役者やスタッフの数も少なく舞台装置も不十分な状態で、子どもたちに本物の感動を提供するなど無理です。そんな安易な考えではなく、できるだけ本物のミュージカルを上演することが必要だと決意したのです。そうして結成したのが下関市民ミュージカルの会です。

**Q** しかし、何も無いところから劇団を立ち上げるのは大変です。

伊藤：全国的には「市民ミュージカル」の名を冠する劇団はたくさんありますが、東京の演出家から指導を受けたり、何とか祭りといったイベントでの公演が主な活動だったり、行政からの補助金だけで活動するなど、その形態はさまざまです。

それに対して、下関市民ミュージカルの会は、最初からプロにも負けない質の高いミュージカルを目指し、毎年オリジナルの演目を上演することにしました。とはいえ、今のように専用の稽古場を確保することもできず、空いている公民館を回って稽古しました。それでも多額の運営費が必要で、老後の蓄えはおろか、イベントプロデューサーなどの仕事で得た収入もすべて会の運営につぎ込んでいきました。会の設立を決意した時は、「自分の老後は捨てる」と決めました。

**Q** 劇団員やスタッフはすべて市民ですね。

伊藤：そこだけがプロの劇団と異なる点で、会社員や学生などの一般市民で構成されています。しかし、市民だからといって稽古は甘くはなく、毎日厳しい指導の声を発しています。プロに転向した劇団員もいますが、彼らに言わせると、下関ですと厳しい指導を受けてきたから、プロの厳しさにも耐えられるそうです。

本物のミュージカル、本物の感動を提供するためには、プロであろうとアマチュアであろうと、演劇に対する厳しさは同じだと考えています。そのために、予算がなくても照明や舞台美術には専門家を雇っていますし、団員たちにも毎回、真剣勝負で舞台に立ってもらっています。

**Q** 年間の活動はどうなっていますか。

伊藤：毎年夏には2日間の定期公演を行い、それ以外にも学校公演、県内外での公演やイベント公演などを行っています。今年は、設立25周年のプレ公演と位置づけ、8月に親子で楽しめるファミリーミュージカル「ふたたびのピリブ」を上演しました。

インタビュー・構成：  
城市創（株式会社ジェイクリエイト）

**Q** 下関市民ミュージカルの会が結成されたのは1988年です。まず、結成までの経緯をお聞かせください。

伊藤：私は子どものころから演劇の虜になっており、高校時代はもちろん、大学時代も演劇部に入りました。その後は、商業演劇として人気の高い劇団四季に所属し、役者としての修業を重ねました。劇団四季の芸術総監督である浅利慶太氏からはたくさんのお話を学びましたが、特に「役者は観客がいて成立する」という教えは心に残っています。というのも、当時は一般の観客には難しすぎる演劇が多く、役者や演出家たちの間では自己満足的な雰囲気蔓延していましたから、一人よがりになってはいけないという教えはインパクトがありました。

その後、いろいろな事情があって会社勤めをした後、生まれ故郷の下関にUターンしました。そんな時、劇団四季から下関でミュージカルを公演しないかという提案を受けました。ただし、そのためにはそれなりの費用が必要です。地元で本格的なミュージカルを楽しむのは子どもたちにとっても良い機会だと思い、寄付金集めに奔走しました。しかし、「ミュージカルなんて」といった反応ばかりで、残念ながら目標額に届かず、公演開催はできませんでした。その時、この下関で市民による